

就学前の重症心身障害児と同年代の健常児が共に遊ぶことに対する保護者の意識**—児童発達支援事業所等に通う重症心身障害児の保護者の自由記述分析から—**

○ 杉並区立重症心身障害児通所施設わかば 望月 太敦 (010010)

小澤 温 (筑波大学大学院・000260)

キーワード：重症心身障害児・医療的ケア・インクルーシブ教育

1. 研究目的

たんの吸引などの医療的ケア（以下、医ケア）が日常的に必要な子どもの6割は重症心身障害児（以下、重症児）に相当したと報告（田村 2019）され、在宅で生活する重症児は増加していることが推察される。幼児期に同年代の子ども同士で遊ぶ機会は、対人関係の基盤を培う社会性の発達につながるものの、社会資源の不足や保護者の考えによって重症児が同年代の子どもと遊ぶ機会は限られている可能性がある。また、地域生活において重症児が他の子どもと遊ぶことについて、保護者の意識を検討している先行研究はあまりみあたらない。そこで、本研究では、地域生活において未就学の重症児と地域の同年代の子どもが遊ぶことに対する保護者の意識を検討することを目的とした。

2. 研究の視点および方法

調査は、2021年2月1日時点のA地域の児童発達支援事業所、児童発達支援センター、医療型児童発達支援センターの計521ヶ所の内、重症児を受け入れ可と回答し、かつ本調査の協力を得た14地域に所在する18事業所に通園している未就学の在宅重症児の保護者、全221名を対象に質問紙調査を実施した。本報告では、この内、「お子様と同年代の子ども（以下、健常児）が遊ぶことについてどのようにお考えですか」の自由記述分析について報告する。自由記述分析は、KHCoder ver. 2を用いて、階層的クラスタ分析で検討した。

3. 倫理的配慮

本調査は筑波大学人間系研究倫理委員会の承認（東2020-96号）を得て実施した。なお、研究協力者に対して、匿名化や研究結果公表等を書面で説明し、回答をもって同意を得た。本発表に関連して、開示すべきCOIはない。

4. 研究結果

18事業所に通園している重症児の保護者（221名）の内、57名（25.7%）の回答が得られた。全ての回答において本調査の同意があり、57名の回答を分析対象とした。対象ファイルに含まれる総抽出語は2,468語（使用語数1,018）であり、何種類の語が含まれるかを示す異なり語数は、492語（使用語数367）であった。また、出現回数の平均は2.46、出現回数の標準偏差は5.30であった。出現回数の多い上位10語は、「思う（45）」「子ども（42）」「健常（25）」「遊ぶ（25）」「本人（24）」「障害（23）」「地域（19）」「刺激（11）」「良い（11）」「機会（10）」であった。階層的クラスタ分析の結果、7つに分類された。第1クラスターは「ケア」「医療」「出来る」「自身」「親」の語からなり、「親自身が色々な事に

気を使う」等の回答がみられ、クラスター名を【親が抱える不安】とした。第2クラスターは「感じる」「発達」「理解」「表情」「通園」の語からなり、「少し年上の友達に可愛がってもらっている時に見せる本人の表情は親からのものとはまた違っています」等の回答がみられ、クラスター名を【重症児の新たな表情】とした。第3クラスターは「児童」「行く」「成長」「刺激」「受ける」の語からなり、「本人も保育園に通う前は児童館などに行き一緒に遊んでいて、とても楽しそうにしていた」等の回答がみられ、クラスター名を【健常児から刺激を受ける】とした。第4クラスターは「大切」「一緒」「遊ぶ」「必要」「機会」「同年代」「難しい」「環境」「公園」「見る」「出る」「歩く」「本人」「友達」の語からなり、「インクルーシブ公園のように環境を整えば、遊ぶことができる環境に、出向くことができる」等の回答がみられ、クラスター名を【共に遊ぶ環境】とした。第5クラスターは「子ども」「健常」「地域」「関わる」「障害」「社会」の語からなり、「様々な個性を持つ子どもがいることを知り関わることで、障害に対して理解ある社会になれば良い」等の回答がみられ、クラスター名を【地域社会の障害理解】とした。第6クラスターは「受け入れる」「様々」「持つ」の語からなり、「健常者が障害者と接点をもつ機会がないので、子どものうちに接触しておくことは大人になってから障害者と出会ったときに抵抗なく受け入れることができるようになるかもしれない」等の回答がみられ、クラスター名を【健常児の将来に向けた経験】とした。第7クラスターは「自分」「知る」「経験」「違う」「保育園」「交流」「思い」「良い」の語からなり、「本人にとっても素晴らしい経験ができていますし、お友達にとっても障害がある同級生と過ごす場は長い人生で間違いなくプラスになる」等の回答がみられ、クラスター名を【互いを知る機会】とした。

5. 考察

保護者は重症児が健常児と関わることで、【重症児の新たな表情】がみられるとし、重症児本人の新しい可能性をとらえる保護者のポジティブな考えが抽出されていた。一方、共に遊ぶことは【互いを知る機会】になるものの、重症児の体調不安や保護者の精神的な負担から【親が抱える不安】があることがわかった。また、重症児の経験として、【健常児から刺激を受ける】機会を求めても【共に遊ぶ環境】がなければ、保護者が安心して重症児を健常児と遊ぶ場へ連れていくことは難しく、【親が抱える不安】につながるといえるだろう。また、分析結果から、【健常児の将来に向けた経験】と【地域社会の障害理解】が抽出された。これらのことから、保護者は、就学前に重症児と健常児が共に遊ぶことは、【重症児の新たな表情】の表出や【互いを知る機会】だけでなく、【健常児の将来に向けた経験】が、やがて【地域社会の障害理解】につながると考えていることが示唆された。

参考文献

- 田村正徳(2019)：－医療的ケア児に関する実態調査と医療・福祉・保健・教育等の連携促進に関する研究－平成28～30年度 総合研究報告書. 厚生労働科学研究費補助金障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野).
- 樋口耕一(2020)：社会調査のための計量テキスト分析(第2版). ナカニシヤ出版.